
眠れぬ夜に

Dear

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れぬ夜に

【Nコード】

N5687A

【作者名】

Dear

【あらすじ】

事故により一部の記憶がないコウタ。バンドのボーカル鉄。二人の男を中心に八人の男女は恋の呪縛に深く迷い混むのであった・・・
・出会いは紅茶専門店喫茶「彩」

第一話 ■ 再会／駆け抜ける雷神

人間はみんな、生きてる限り、恋をする。
初恋でフラれて泣いてたりする。

じゃあ、恋をしない奴は人間じゃないの？

思春期の真っ最中。

それが中学生の真実。誰もが経験する時代。

俺は虹城 コウタ（ニジシロ コウタ）っていう中学二年のタダの悪ガキ。

そう、あの日恋をするまでは・・・

昔、住んでいた福岡に帰って来た春休み。

そこで、待ってたのは幼馴染みの牧 ケンタ（マキ ケンタ）だった。

転校を知らせていたのできてくれて・・・

いたのだが、隣りにいる女の子が目から離れない。懐かしい気がするのだが、こんな美人は知り合いにはいなかったから・・・

バコッ！！

よそ見をしている俺にケンタが殴った。

「アヤカばかり見てんじゃねえよ！」

アヤカ？最初は分からなかった。

だが、目の下のホクロで思い出した。幼馴染みは二人いた事を。

「変わったね？」それが、俺への言葉だった。ケンタは首を傾げたけど。

名前は美月 アヤカ（ミツキ アヤカ）

俺は思わず人生で二度目の雷が体を駆け抜けたのだった。
しかも、初恋の女の子に対して・・・

一度事故にあつて以来初めてケンタ以外の記憶が戻った。実は交通事故によつて小さい頃の記憶がなくなっていたのだ。親友のケンタとの記憶を除いて・・・

しかし、初恋の記憶まではもどらなかった。

これが初恋かあ？

それが最初の想い。

一目惚れだと勘違いしているが、記憶の奥には彼女はいたのだ。
だから、彼は恋をしたのだ。中学の春休みに初恋の女の子に二度目の初恋を・・・

でも、これからが眠れぬ夜の始まりだとは、コウタは気がつかなかつたのです。

思春期の恋は一つではないのだから・・・

第二話 ■ 二人く忘却

初恋は実らない

そう決めたのは誰？

両想いでも叶わない恋なんてあるの？

再会を果たした三人はある喫茶店に入った。

紅茶専門店

「彩」

アヤカの家である。

久しぶりやな？

マスター、つまりアヤカの親父さんがそう言って出迎えた。

とりあえず、コウタは挨拶をしてアールグレイを頼んだ。名前に惹かれたのだ。ケントは難しそうな名前のラプサンスーチョンを頼んだ。アヤカはサイレンスという紅茶を頼んでいた。店はすぐに貸し切りにしてくれた。

アヤカが気になってしまって、コウタは何度も見ていた。

長い髪に目の下のホクロ、なかなかの身長に成長中の体。思春期には気になってしょうがないらしい。

ケントは記憶が無くなった時にも忘れる事なかった親友だ。

隠し事はした事がないくらいだ。でも、初恋の事は黙っていた。

だから、ケントはアヤカが彼の初恋なのだと知らないのであった。それが、命取りになるとは思わずに・・・

お店のドアが急に開かれた。しかも、とても荒々しく。

神様はイタズラ好きなのですね？

確かにコウタの初恋は

「アヤカ」

でした。

二人は知らない

両想いなのに・・・

アヤカの初恋の相手

そして、さっきまた恋をしてしまった

コウタに・・・

でも、神様はイタズラ好きなのですね？

入って来た女の子

それは

「アヤカ」

の双子の妹の

「アヤナ」

だったのです・・・

アヤナはいきなり抱き付いた。思わずコウタは硬直してしまった。アヤカとアヤナはそっくりな姉妹であった。アヤナがショートカットで積極的な事を除いては・・・

コウタを急激な頭痛が襲い、彼は倒れた。

記憶喪失のせいで忘れていた女の子。

それが双子として現れた。頭がショートしたのだ。しかも、抱き付かれたせいで、さらにショート化が進んだのだ。そして、記憶は間違った方へ進んで行く運命にある。

だって神様はイタズラ好きなのだから・・・

第三話 ■ 親友くシンクロする心

親友って何？

まるで鏡みたいだよ

兄弟みたいなんだよ

だから辛いのださ．．．

コウタが倒れた。

それを見て目の前の双子、アヤカとアヤナはパニックになった。

おじさん！部屋貸して下さい！ってケンタは言った。

慣れているのだ。

前にも何度か記憶のショートがあつたのだ。

前は亡くなったケンタの母親の話をしている時だった。優しくて温かい彼女が亡くなった事を知らずにコウタはケンタに聞いてしまつて、彼女の記憶を蘇らす為に倒れた。

人生で一番ヤバいと思つた日である
会いに行つた事を後悔した日

目が覚めた時ケンタは泣いていた

コウタも泣いていた

心がシンクロする二人は最高の親友だ。

ソファーに寝ているコウタに見ているケンタという親友。

喧嘩もした事がないくらい息がピッタリな二人の悪ガキ

それが二人の運命

ふと、アヤカとアヤナが、コウタが気になって見に来た。

アヤカはどこか大人びた女の子である。消極的だが、意外に気は強いところがある。

アヤナが心配で泣いていた。

あえて、コウタをアヤナに任せて店に二人は戻った。

ケンタは去年から、アヤカに恋をしていた。

ラプサンスーチョンは少し癖のある紅茶だ。その癖が好きなのに何故か今日は美味しくなかった。

アヤカはコウタが好きなのかな？

そんな事をずっと考えていたのだ・・・

見ていれば何となく分かる位、付き合いの長い幼馴染みである。でも、好きな気持ちは止まらない・・・

運命は過酷だね

壁があれば乗り越えようとする人々

そして、道はできる

アヤカはコウタの次にケンタが好きだった。

その頃、コウタの意識は戻りつつあった

混沌の世界へと・・・

夢の中？

誰かはわからないけど追いかけて来る

幼い記憶

福岡から引越す日の記憶であった。

車を追いかけて来る女の子

コウタくん

そう叫んでいる彼女

泣きながら走る彼女

彼女の名前は美月・・・

第四話 ■ 偽りの記憶くすれ違う初恋

彼女の名前は美月．．．記憶は確かであった。

そう、美月．．．

美月なのだから．．．

彼女の名前を呼ぼうとした夢の中の記憶

その時、コウタはまた呼ばれた

コウタくん

泣いている？

近くで？

心地よい感触．．．？

目が覚めるとそこにはアヤナがいた

美月 アヤナ

偽りの記憶

夢の中の女の子？

間違った初恋の記憶

全ては動き出す

顔に抱き付かれて動けないコウタ

正に金縛り状態・・・

思春期の男には危ないシチュエーション

アヤナは気付いたが離れない。

むしろ楽しそうにより強く抱き付いた

アヤナは男ッぽい性格なので気にしてない

アヤナはアヤカに比べて、スタイルがより上をいつている
中学生とは思えないスタイルにコウタは再び失神寸前である

思わず紅茶が飲みたいといい逃れてみた。
作戦は成功した

アールグレイ

古典的なフレバーティーの一つである
グレイ伯爵の名前からつけた紅茶だ

何故かアヤナが一人で持つて来た

後からケンタに聞いたら、気絶させた原因なのだから、一人で看病
したいとの事

飲もうとしたら、アヤナが飲みたそうに見ていたので、気まずい

アイスティーなのだが、すんなりと飲めない

一口飲む？

喜んでストレートのオールグレイを飲むアヤナにドキッとしてしまったコウタ

記憶の中に初恋の相手としてのアヤナがいるからだ

偽りの記憶に・・・

その時、彼女は冗談っぽくコウタに言った

間接キスだね

彼女はコウタに、自分を覚えているかを真剣に聞いた

コウタは言った

初恋の人を忘れていてもすぐ思い出したよ

聞いた瞬間、急にアヤナは赤くなり、恥ずかしそうに自分の部屋に行った

その日の夜

コウタは眠れなかった

思春期の男には強過ぎる刺激と出会いがあったのだから・・・

いろんな意味で眠れなかった・・・

思春期だもの・・・

眠れぬ夜に

走り出した流星

偽りの記憶

止める事は誰にも出来ないのだ
・
・
・

第五話 ■ もう一人の主人公

いつの間に始まった？それが恋ってモノ

五月中旬

紅茶専門喫茶

「彩」

そこで、人を待っている高校生がいる

アールグレイを飲んでいる顔立ちのいい男

イチモンジ
一文字 テッ
鉄っていう常連だ

「マスター！最近娘さんと仲良くしてますか？」
といった話をしていると、そこへ双子の妹アヤナが帰って来たのであった。

「あれ？鉄にいい！」

「久しぶりやな？元気かあ？」

そんな話をしていると、姉のアヤカも帰って来た。

「鉄さんこんにちわ！」

「相変わらず美人姉妹やなあ？こりゃ恋してるか？」

なんて会話していると照れくさそうにアヤナが話出した。

「幼馴染みが帰って来たの！しかも、かっこよくなって！しかも、学校のクラスも同じなんですよお！」

そんなテンションの妹に少し顔を曇らせる姉に気付いた。鉄は感じとった。双子は好みが似てるのね？

そんな事考えていると待ち人がやっと来た。

どう見ても、かわいい感じの顔立ちの男

難波 ナンバ 翼 ツバサ

そして、実写版の峰ふじ子の異名を持つ女

間宮 マミヤ 真里 マリ

「鉄うゝ！待ったあ？」

なんてわざとらしい猫なで声で翼がからかう真里が笑いながらあやまる。タイミングよくマスターがSPチャイとアップルティーが出る。される。

「頼んでおいたぞ！」

と鉄は笑いながら言った。翼の飲むSPチャイはとんでもない紅茶なのだが、それはまだ先の話にて・・・

「店長うゝ！ギターがやめたゝ！引ける奴知らない？」

翼は嘆く。

マスターはニヤリと笑って店の曲を変えた。

ジミ・ヘンドリクスを彷彿させるギターだった。

「何もの？」

真里が聞いた。男も女も好きな真里が双子をいじりながら聞いた。

「女の子だよ。お前らと同一年のな・・・」

鉄はそのギターに恋をした。そのせいで眠れぬ夜を過ごしていた。

どんな女が・・・

眠れるはずはない。

新たな恋の序曲

第六話 ■ 鎮魂歌

話した事はない
でも、前から知っているような気がする
運命なのかな？

喫茶

「彩」

マスターはおいしい紅茶とシフォンケーキを彼女に出した。

限定のさくらのフレイバーティーを飲んでいる客

ヤマブキ
山吹 命

セミロングの髪にシャンプーの香り漂う綺麗なお嬢様系の女の子

そこに、翼から逃れて鉄が来た・・・

アールグレイを頼んだ時に、彼はマスターにギターの少女を紹介して欲しいと頼んだ。

しかし、マスターは笑うばかりで話を聞かない。翼より先に話したいのだ。彼はマジだ。

そして、隣の彼女が静かに呟いた・・・

「わ、わたしです。」

彼女を真里の家に連れて行った。真里の家には兄の防音のスタジオがあるのだ。

「.....」

真里は彼女を見て固まった。
そして、いきなり抱きしめた。

女も好きな真里のド真ん中に入る娘だった。
鉄はギターを聞きたくてしょうがなかった。
命が引き始めた曲

それは、今は亡きhideの名曲ピンクスパイダーであつた.....

別人だと思つたほど彼女は激しくギターを奏でた。いつの間にか、真里はフェンダーのベースを、いつ来たかわからない翼は甘いマスクで風を斬るドラミングを、もう鉄は歌わずにいられなくなっていた。

初めてのキス

それより激しい愛を感じた瞬間

誰より心がシンクロする四人の若者
最高だと思つた

一週間後

バンド

「ファントム」

はより強く蘇つた。

まるで、紅く燃える不死鳥のごとく.....
彩を通じる八人

彼らの運命は止められないのだ.....

流れ始めた鎮魂歌

マスターは珍しく早めに店を閉めた
・
・
・

第七話 ■ それは現実

ごめんなさい

そういう運命なんだ

気持ちは止まらない

せめて気持ちだけうけとってよ．．．．

アヤナは迷っていた。

ピンクと黒

コウタはどっちが好きなのかな？

今日はコウタと遊びに行くのだが、勝負する気まんまんである。

店にアヤナが降りるとそこに、鉄がいた。

「ああ！鉄にい！待ち合わせ？」

「ん？そうだ．．．．」

急に鉄の言葉が止まり笑いだした。

「噂のコウタとデートかな？」

「ええ！すつごゝい何で分かるの？顔に出てる？」

「そんなにやる気まんまんの格好じゃあ分かるだろ！（笑）」

「言い方がエロい！鉄にいのエツチ（笑）」

会話を割って下から声が聞こえた

「下着は黒つてどこかにゃ？」

この甘ったれたにゃは、女も好きな真里だ。いつのまに來たんだろ？

「うわっ！ちょっと！恥ずかしいですよ！真里さん！」
「ああ、一口食べたいなあ……」
なんてほざいている。

翼がいればきつと……

「俺もまざりたいなあ」

なんて言うんだろうが、今日はバイトでこない。

命を待っていた鉄

だが、携帯が鳴り家に帰るハメになった。

親父が再婚

相手を紹介してくれるらしい。

なるほど綺麗なお嬢様系の人だ……
ん？誰かに似てる。

すると、その後ろに命がいるのに気がついたのだった。

お前の妹だ……

それが最初の言葉

お互いに思いつき爆笑した……

心は泣いていたけど

だって、昨日付き合い始めた二人なのに。

その頃、カラオケに行ってる二人。

コウタとアヤナ

アヤナの勝負する気まんまんの格好に、コウタは少し興奮していたのだった。

曲が止まった

コウタがアヤナを見た瞬間・・・

目の前が真っ暗になり柔らかい感触が・・・？

息が出来ない

アヤナの声がする

好きだよ

アヤナの殺人級の胸から逃れて彼女を見た

そこで初めてコウタは大人のキスをした

ん？アヤナ？どこを触ってい・・・

気持ち良くない？

まさかのまさか、コウタは食べられそうになっていた・・・

翼はバイト帰りに彩に寄った

そこには、真里とアヤカ、ケンタがいた。

四人の運命

少しずつ加速していく音速の音色

翼はSPチャイを頼んで三人に混ぜた。

それが新たな始まり

第八話 ■ 銀の星屑く聞こえぬ叫び

二人共好きなんだ

よくある事だよな？

でも、選べるのはどちらか一人だよ・・・

夕方、翼が汗だくで彩に入ってきた。

翼は初めて見る男がいた。ケンタだ。

三人の席に座ると真里がご機嫌でニヤけている。この女好きが！

「ご機嫌だねえ（笑）」

「ああ！助けてくださいよ！翼さん！」

翼専用SPチャイ

蜂蜜が入っている紅茶なのだが、翼は通常の10倍の蜂蜜なのだ。間違えて飲むと、目の前に、お花畑が見えて来るらしい・・・

今、丁度ケンタが試飲して、水をガブ飲みしているところだ。

「すごいヤバイ甘さなんですけど？致死量ですよ！」

「でも、鉄も飲むよ普通の顔してねえ！」

「鉄さんも!？」

驚いたのはアヤカ

「そうだにゃー鉄は意外に甘党なの！」

真里がアヤカに甘えて言った

真里はかわいい女の子には目がない

といつても、普通に男が好きである。要するに、デザートだ

翼は気付いた

ケンタがやたらにアヤカと真里を見ている事にね

二股はいけないよ

まあ、真里の餌食にしてやろうかな？（笑）

最初はただの冗談

真里、ケンタがお前を見て生唾飲んだぞ。

それを聞いた真里の目の色が変わった

実は彼女は年下好き

真里は標的をケンタに変えて店から連れ出さしたのは言うまでもない事だろう……

アヤカは意外にも翼と仲がいい。鉄よりも翼と仲がいい。

デート中のコウタが気になるが……

夜になるまで話した

そして、翼は近くの公園にアヤカといた。

アヤカは不思議な気持ちだった。一緒にいると安心した……

悩みごとは……

翼がアヤカにそう言って上を指差す

タイミングよく流れ星が流れる

星に願えば書き消してくれるよ．．．

そう言った翼にアヤカはキスをした．．．

蜂蜜の味がする

それが始まり

好きになっていた

一方、ケンタと真里のお二人は．．．

ケンタの声は防音のスタジオに書き消されたのであった。

助けは来ない．．．

真里はとんでもなくスタイルがいい

実写版の峰ふじ子

いたとしたら真里だ

ケンタの不思議な冒険の始まりであった。

それは、愛へと変わるのだろうか？

私から逃げちゃダメにゃん？ケンタン？

店を閉めたマスターは珍しくタバコを吸ったのだった。

放任主義なので口にはださないが心配なのだろう・・・

暗い空に煙が舞う

誰かの心にも・・・

第九話 ■ 続く未来へ

思春期の会話

女の子は恋バナ

男はピンクな話

あの頃は、みんなそうだった・・・

げっそりした二人

コウタとケンタだ

二人は大切な何かを昨日失った・・・
何かはご想像にお任せしますが・・・

一方でご機嫌の真里

今は待ち合わせ中

そこに小さな女の子がテクテクと歩いて来たのだった・・・

「ご機嫌だニヤ〜！」

親友の雪だ

言葉使いは恐ろしく似ているが見た目は幼く天然の萌えキャラらしい・・・

「昨日ねえ・・・いいのが入ったのん」

「年下ニヤン？」

「当たり前にな〜！」

「ダメニヤン？」

「何が？」

「一口・・・」

「ダメにやん！ケンタンは譲れないにや〜」

その頃、もう一人のげっそりさせた張本人のアヤナは部屋を片付けていた……

小さい時のコウタの写真にうつとりしながらだが……

その時、コウタが昔送った手紙入りの可愛い封筒を見つけた

また会う日まで見ちゃダメ！と書かれた封筒が気になり、中を見てみた……

それは、ラブレターだった……だが、アヤナではない

だいすきなアヤカちゃんへ……

アヤナは気付いた

初恋は自分ではなくてアヤカなのだと

兄妹のいるバンド

血の繋がらない兄妹

それと共に二人は恋人なのだが……

昨日の事

親に打ち明けると意外にもとんでもない事を鉄の親父が言った

結婚式と一緒にするしかねえな？

……？

結婚？まだ高校生なんだけど……

との事で親父達の結婚は何年か先になった

その代わりに、明後日から新婚旅行に行くらしい・・・
二年間ほど、海外出張が決まったらしい

つまり、二人で暮らさないといけない

何が起るかわからないから面白い

時間はここからしばらく飛ぶ事になる

この先どうなるの？

ちゃんと続くよ

特別編 ■ 桜散る、桜咲く

時が過ぎていく

それでも変わらない

それが彼の愛

今日も娘たちが学校に行くのを見送る男

紅茶喫茶の彩を経営するマスター

それ以上でも以下でもないのが彼 . . .

妻を亡くして彼は一人で双子の娘たちを育てて来た . . .

彼に出会いは少なくなかった

だが、彼は妻の死に際に妻が言った遺言を忘れてなかったのだ . . .

.

それは、不運な事故

買い物帰りに、娘の年頃の子どもが、車に気付かずに車道に出た . . .

. . .

頭より先に体が動いた彼女は、子どもを無事に助けた

かわりに、彼女は . . .

娘を知り合いに預け、店を閉めたマスター

彼は病院に向かった

「大丈夫だ！お前は生きるんだ！」

「あの子どもは大丈夫 . . . だった？」

「少し頭を切ったみたいだが、命には問題ないそうだ！」

「そう．．．私はもうダメみたいだわ」

「二人はどうするんだよ！お前は娘をおいて逝くのか！？」

「大丈夫．．．あの子たちが幸せになるまで．．．あなたの側についてるわ．．．頼むわ．．．ね．．．」

娘たちが幸せになるまで．．．

彼はその言葉を信じているのだ．．．

店を開くと何処かで声がする．．．

近くだけどわからない．．．

その時、足に歩いてくる弱々しい子猫に気付いた

うにゃ〜

変な鳴き声

彼の後ろをついてくるこの子猫

仕事をしてると後ろからついてくる

トイレに行くとドアの前で待っている

カウンターで本を読んでいると、急にいなくなった．．．．．と思
ったら、テーブルの下でうにゃ〜と鳴いている．．．

さすがにお客さんがくるまでに出さないと．．．

そう思っただけ抱き上げると、首のところに桜の花びらのような模様を
見つけたのだった．．．

桜の咲く季節に出会った彼女、桜子はとても美しく紅茶が好きな女
性であった．．．

そして彼女の首には、桜の花びらのような薄い痣があったのだ．．．

「僕と一緒にお店を開きませんか？」

そう言っ、桜子に彼は指輪を渡したのだった．．．

うにゃ？

子猫の鳴き声にふと、我にかえった

子猫は一瞬、彼に対して片目を下げてウインクをしたのだった．．．

夕方、娘たちが学校から帰ってくると彼は新しい家族を紹介した

子猫の名前は桜

一応確かめたが、メスであつた

彼は密かにを感じとっていた．．．

娘たちが幸せになるまで側にいる

子猫は生まれ変わりなのだと．．．

桜を見ると、娘たちを彼女は見ていた

特別編 ■ 桜散る、桜咲く（後書き）

どうもDearです

本当は短編で書こうと思っていた特別編なのですが、あえて連載中の特別編として書きました
いかがでした？

ツマらないとか言われぬように今後も頑張りたいと思います
しばらく、同時連載中のゼクロスを進める為に特別編を書こうかと考えてます

ですので、本編はもう少しお待ち下さい
長い文を読んで頂き、ありがとうございました

特別編その2 ■クラスメート

未だにわからない

それは必然の出会い

最初の出会い

それは、中学の時であつた．．．

「何見てるんだ？何かようか？」

「いい声してるな？でもムカツクうゝ！」

鉄と翼はガンを飛ばして仁王立ち状態

次の瞬間、殴り合いは始まつた．．．

そこにふと、女の子が近付いて来た

「やかましいにや！二人共！」

そう言つて見事に二人を殴り飛ばしたのは真里である
空手をバリバリでやっているらしく、とても強かつた．．．

仲が悪いクラスメートの三人

それが始まり

放課後、真里は上級生に口説かれていた
だが、可愛い顔して上級生の股間を蹴り上げたのだつた．．．

相手はこの中学をまとめている男
古い言い方で言つと番長つてやつ？

それにより、真里は番長くんの周りにいた上級生に囲まれた

「何をやっているんじゃないか！この野郎！」

「ヤローじゃないですよ？女ですから！」

「ナメてるのか！」

「違うモノ舐められなくて口説いてる奴等に言われたくない！」

そこにふと、翼が来てしまった……

反対側からは鉄

運命の悪戯か？

真里達は二人が喧嘩の待ち合わせをしていた所にいた……

五分後

そこに残っていたのは上級生の屍……じゃなくて気絶した上級生達

なんで？

一瞬だけ、気に入らないものが重なった三人の悪ガキ

群れて強がるのは好きでは無い……

帰りに話した会話

それは、音楽の話

今は無きhideから始まり、いつの間にか彼らは仲良く帰っていた

何ニヤついでるん？

紅茶を飲む鉄に翼はたずねた

出会った頃を思い出したのさ．．．．
そう言つて彼は真里を見た．．．．

しかし、怖い女だったな．．．仲間になるまでは．．．
気持ち良さそうに、うたた寝する真里はその視線には気付かなかつたのだつた．．．．

「アーン！？上手よ！ケンタン．．．むにゃむにゃ．．．」

．．．まだ怖い女だと思ひ直した鉄であつた．．．

特別編その3 ■ 真実と謎

げっそりとした二人

コウタとケンタだ

二人は昨日の嬉しいような悲しいような悪夢を思い出していた・・・

・

アヤナの目は草食動物を食べる肉食動物のように輝いている・・・

キスまでいいよ

でも、これから先は大問題だ！

「ダ、ダメだよ！そこは・・・んぐ！」

「まんざらでもないんでしょ？おりゃ」

「アヤナ・・・ダメだっ・・・」

「あん！？ダメって言うてるのにこの手はなぐにかなあ？うん・・・

」

偶然にも、突き放そうとした手がアヤナの胸に当たったのだ

我慢できねえ！？

ダメとは言ったもの、思春期には辛い現実

手が勝手に動く

ブルルウウ

良いところでお時間ですの電話が鳴る

「もう少しなのに・・・勿体ないなあ？コウタ、こんなになって・

」

コラ！それ以上は言うな！という誰かの声を聞こえたような気がする
いったい誰だ？

「次はしつかり書いてね？」

アヤナ？誰に何を言ってるの？

逃げるにや！しつかり覚えるのケンタン！

真里のベース指導

辛い．．．でも、後頭部に当たる柔らかなモノは少し嬉しい．．．

ケンタは真里にいいおもちゃにされていた

うまくできるとキス

ミスすると関節技

まさにヘル&へブ．．．

「そこはそうじゃないにや〜！」

と、すかさずヘッドロックをかける真里

胸が当たってる．．．まさにヘル&へブ．．．

コラ！勇気出してくれるのはいいけど、それ以上は勘弁しろ！

だ、誰？と言うケンタを無視する真里

「気にしない！ただの．．．にや！」

「肝心なところが聞こえないですよ！？」

そう言つて、今日四度目の脱獄をはかる

だが、真里は恐ろしいスピードでケンタを捕まえたのだった．．．

私から逃げちゃダ・メにゃん？ケンタン．．．

そう言つて見事なキスを．．．
ん？いつの間に服を脱がされているんだ？
記憶がないぞ！？

「い・た・だきますにゃ！ケンタン？」

彼は人生で一番早く走り逃走した．．．

二人でげっそり

うまい紅茶を飲んでもげっそり．．．
でも、まんざらではない二人

無くした大切な何か

それはファーストキスと純情な心

ニヤリと思い出していた二人であつた．．．

そして、二人はアレは誰の声だつたか悩んでいたのだつた．．．

いや、作者ですよ！

特別編その4 ■妹想いなお兄さん

年下の彼女

予想外の現実

女の子からのキスなんて翼は初めてだった……

蜂蜜の味がする

そう言ったのはアヤカである

翼は顔を紅くしてタバコを吸った

「意外に大胆やな？お前は真里か！」

「ごめんなさい……怒った？」

捨てられている子猫のような目で呟く
溜め息をついて翼が話出した……

「俺には昔、妹がいたんよ……」

「えっ？初めて聞きましたよ？」

「みんな気を使ってくれてるんよ？」

難波 美樹

それが妹の名前

年はアヤカと一緒に……

彼女が生きていれば……

「よく、大人になったらお兄ちゃんと結婚するって言ってたよ……」

「妹さんはいつ？」

「小学一年になった時に……車に跳ねられたんよ……」

うつむくアヤカ
タバコを消した翼

「お前の目は妹に似ているよ．．．」

「本当ですか？」

「俺は年下は好みじゃなかったんだけど．．．」

そう言つて翼はアヤカにキスをした

苦いですよ

アヤカは言つた

タバコの後のキスは吸わない人には最悪なのである．．．

「私は妹さんの代わりなんですか？」

少し泣きそう

「うーん、少し前までそうだったんやけどなあ．．．」

そう言つてアヤカを抱き寄せる翼

「翼さん!？」

「俺は好きになると一途なんよ．．．」

そう言つてアヤカの髪をくしゃくしゃになるまでなでる

「浮気したらゆるしませんよ？」

頭を肩に傾かせて乗せて言うアヤカ

「それは無理やな．．．お前と同じくらい俺はドラムが好きやからね？」

そう言つて今日三回目のキスをした．．．

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5687a/>

眠れぬ夜に

2010年12月8日20時36分発行